

第4回 千曲市食料・農業・農村政策審議会会議結果

日 時：平成22年11月24日(水) 13:30～

会 場：千曲市役所 上山田庁舎 301 会議室

出席者：村山会長、橘田副会長、関口委員、北村委員、西村委員、山本委員、三井委員
荻原委員、瀬在委員、渡島委員

欠席者：寺澤委員

議 題：農業施策に関して

.....

1 開会

2 会長あいさつ

村山会長よりあいさつ

3 経過報告

事務局より説明

4 議 事

(1)「2-1 農業の基幹的な担い手とその後継者、多様な担い手である女性や高齢者、新規就農者等の育成及び確保に必要な施策」について

- ・資料に沿って事務局より説明
- ・質疑応答については以下の通り

村山会長	アグリサポーターについての説明をお願いしたい。
事務局	現在は20人程度で、上手くやりくりがなされている。今以上に人手が増えたとしても、人手が余ってしまうということが考えられる。このほか、サポーター1人当たりが得られる金額が少なくなり、参加するメリットが薄くなるなどが考えられる。
委員	アグリサポーター制度を利用させてもらっているが、季節によって繁忙期、閑散期が異なるが、繁忙期においては今以上に多くの人を派遣してもらえると助かる。
村山会長	サポーターを増やすとしても、需要と供給のバランスをよく調整する必要があるだろう。 JAのアグリセミナーの成果はどうか。
委員	10年ほど前から行っているが、延べ参加人数は100人程度かと思う。現在は20名ほどの参加で、月に1回のペースで、1年かけて農作業のやり方に

	<p>ついて学習している。</p> <p>受講者約 100 人のうち 1/4 は、卒業後に専業として農業を開始した。農家出身の受講者もいるが、定年帰農を目指した農業関連の知識の少ない人が主な参加者層である。</p> <p>セミナー内容について、卒業生からは好評を得ているが、一方で「参加するのに勇気がいる」「敷居が高い」という声も聞かれる。</p>
委員	<p>農家の減少、農業者の高齢化が進行するなかで、世帯個々に稼ぐ農業を行うのは難しいため、法人化を積極的に進める必要もあるのではないかと。成功事例を参考に、法人化を進める必要があると思われる。</p>
村山会長	<p>課題の捉えかたを変える必要があるのではないかと。本日の書類では「(1) 小規模農家・兼業農家」、「(2) 認定農業者等の意欲ある農家」、「(3) 農業生産法人」、「(4) 市民」、という順序に課題や取り組みの方向が示されているが、いま委員がおっしゃったように、産業として振興させていくためには、(2) → (3) → (1) → (4) と順序を入れ替え、力点を変えた方が良くないかと。</p> <p>また、リーディングプロジェクト案も、(1) と (4) の内容に対応したものであるため、(2) や (3) に対応するプロジェクトが必要であろう。</p>
委員	<p>私ども自身が、農業法人として活動しており、認定農業者でもあるが、認定農業者のメリットがいまひとつ分からない。どのようなメリットがあるのか？</p>
事務局	<p>大型機械設備の投資のための融資等などが受けられるようになる。</p>
委員	<p>強い農業体への支援も必要であるが、小さな農家が生きていける支援方策も必要である。その意味で、リーディングプロジェクトの「農機具バンク」は良いアイデアだと思う。</p>
委員	<p>J A で作業受委託は行っていないのか？</p>
委員	<p>個人的に受委託を行っている農家は、10 年ほど前からあるが、J A としては行っていない。取り組みを進めている事例を参考にしながら、現在検討しているところである。</p>
村山会長	<p>認定農業者や農業法人育成のための制度設計や研究について、計画に記載した方が良くないと思われる。</p> <p>もう一つのリーディングプロジェクトである「市民農業学校」はどのようなものを想定しているのか？</p>
事務局	<p>指導者として J A の O B や農業委員を想定している。農地としては約 800 m² 確保している。1 年間、農作業をし、生産したものを自分で食べる場所まで経験できるようにしたい。</p> <p>ターゲットとしては、農家・非農家は問わず、農業に関心があり、農業をやってみたいと考えている人を想定。いずれは積極的な市民農園利用者になってもらいたいと考えている。</p>
村山会長	<p>県の里親制度とも絡め、新規就農も含めた道筋を作る必要があるであろう。</p>

(2)「2-2 年間を通じて栽培される多種にわたる作物の振興、高品質優良農産物生産の推進による農業の収益性向上並びに経営の安定を確保できる農業の仕組みづくり及び支援に必要な施策」について

- ・資料に沿って事務局より説明
- ・質疑応答については以下の通り

委員	麺や菓子の製造をしているが、事業のポイントは原材料価格と味である。これについてであるが、現在、ブランド認定協議会では「国産」という条件を加えるかどうか、という議論もあるのだが、例えば小麦を例にとると、アメリカ、カナダ産のものが多く、値段もかなり安い。しかし、海外産に勝るものが国内や市内にあるかという点、そうとはいえない。つまり、国産等を使用すると、原材料価格などの関係から、消費者にとって望ましくない結果となる可能性が十分考えられる。「産地限定」、「ブランド化」などの議論をする前提として、この点を認識しておく必要がある。
村山会長	厳しく審査し、厳選して認定をする、それによって高い品質を確保するというやり方と、認定基準をゆるく設定し、たくさんのもを認定品として広めていくというやり方が考えられる。
委員	千曲ブランド産品がおいてあるのは何箇所あるのか？
事務局	4箇所である。
村山会長	現状のブランド認定制度では、産地等の条件はあるが、品質に対する保証はないため、市外の人に対しては訴求力がないのではないかと。こういった点を踏まえ、千曲ブランドの位置づけやブランド化のための戦略を考える必要があるだろう。
村山会長	土地の合理化についてはどうか。
委員	山手の辺りは、耕作可能な土地が少なく、難しい。荒廃農地の解消を考えるのも難しいと思われる。
委員	農地バンクは必要であると思われる。ゼロから土地の取得を行うのは困難で、特に法人参入を促すという点からも、こういった制度が必要なのではないかと。

(3) 「2-3 産学官連携による農業関連技術の研究開発及び製品化に必要な施策」について

- ・資料に沿って事務局より説明
- ・質疑応答については以下の通り

村山会長	産学官連携についてであるが、以前からどのように連携を図っていけばよいのか、分からないという課題があった。結果、これまでは個人のネットワークに依存していたのではないかと思う。
委員	あんずの成分分析はどのように行われているか。
事務局	信州大学の農学部を母体とする「信州機能性食品研究会」との共同研究として行われている。あんずの健康機能として、認知症の原因となる物質の形成を阻害する効果がありそうだという報告がなされている。
委員	共同研究等に係る費用は、市や商工会で補助をしているが、それでも個人や企業個々に、大学等との連携を進めていくのは難しいのではないか。
村山会長	連携先を見つけるために、信大の産学官連携推進本部などを有効活用して欲しい。また、工学部には地域行動研究センターがあるが、これは従来は工業系だけだったものが農業関係のものも研究するようになっている。その他、県内の19の大学・高専等から成る産学官連携機構という組織もあり、こういった様々な組織を有効活用して欲しいと思う。 なお、本年度信州大学で行われている「信州直売所学校」については、来年度も開催されるのではないかとと思われるため、この活用についても併せて考えていただきたい。

(4) 「2-4 農薬及び肥料の適正な使用、家畜排泄物等有機物資源の有効利用による土づくり等持続性の高い農業生産方式の導入に必要な施策」について

- ・資料に沿って事務局より説明
- ・質疑応答については以下の通り

委員	高山村では村の施設で牛糞を使った堆肥を用いるなどしている。また、ほとんどのりんご農家でエコファーマーを取得している。こうした取り組みにより、有機栽培、減農薬栽培のりんごが生産されており、ブランド化もされている。 本市では、畜産農家が少ないという話があったが、それならば食物残渣を活用した堆肥化の方向性を考えてみてはどうか。
委員	食物残渣を用いるためには、塩分が除かれている必要がある。堆肥を作るにあたっては、その様な前提を担保されなければならないため、残渣を出す側との連携が重要になる。
委員	昔は麦や稲藁の堆肥もあった。堆肥を用いるとおいしい農産物を作ることにはできるが、現在は堆肥を用いる農家は減ってしまった。
村山会長	集団的に堆肥化を進めていくことはできないだろうか。本市では畜産農家

	が少ないことも踏まえ、畜産農家の多い他市との連携によって、これを推進できないだろうか。
委員	堆肥化の施設を作ることを考えると、ずいぶんとお金がかかってしまうため、あまり現実的ではないように思われる。むしろ、工業製品としての堆肥を購入する方が、農家にとってはコストメリットが大きい。
村山会長	地域内循環を進めるという観点からの堆肥化は難しく、一方で農家のコストメリットを考えると工業製品としての堆肥を購入した方が望ましい。この、地域内循環と農家のコストメリットをどうバランスさせるのかについては、研究が必要であろう。これはリーディングプロジェクトに位置づけ、解決すべき大きな課題として扱った方が良いだろう。 また、エコファーマーについては、一定以上の農家が取得することで「数の多さ」によるブランド化の可能性も考えられる。これについても、「2-2 収益性向上」の施策のブランド化の取り組みとあわせて検討していく必要があるだろう。

(5) 農業施策全体について

- ・質疑応答については以下の通り

委員	「販路が確立していること」が農業繁栄の前提条件である。これを確立するというのを、どこかの施策に盛り込みたい。
委員	「2-4 持続性の高い農業」施策のリーディングプロジェクトに示してある「環境農業点検シート」については、食料施策の中で出てきた「GAP」の取り組みと重複するところもある。まとめられるなら1つの取り組みとしてまとめてしまってもどうか。

5 その他

事務局より説明

- ・次回は12月20日(月)の開催を予定している。

6 閉会

橘田副会長より閉会の挨拶

以上